

歴史が語る「ものづくりは人づくり」の意味する所とは？

日本工業教育経営研究会 顧問 櫻井和雄

はじめに

何が正しいかという観点よりも、何が自分にとって好ましいかが判断の基準になり、その結果、物事のありのままの姿、真実を見誤ることが少なくない。従って、出来るだけ私心を去り、何ものにもとらわれない心で物を見ていくことが大切である。

「技術は何の為にあるのか」と問う。

ヘンリー・ダイアーは「エンジニアは、真の革命家である。エンジニアの創意で近代社会が作られてきた」と言う。

出光佐三氏は「交通の発達により狭くなった世界に百以上の民族が雑居している。もはや権利思想や個人主義では絶対に上手くいかない。互譲互助と和の精神が必要である。科学技術の進歩は、その前に人間の尊厳が確立されていなければ、その進歩は無条件に喜べないばかりか、むしろ不幸と見なければならぬ」と語り、自ら信じる会社を創り上げた。

人格の陶冶について、昨今の人間の姿を直視して考えれば効果があったと言えるのか。

明治時代に生じた国民道徳の退廃の原因は、知識才芸の教育にあるのか、急激な社会変化にあるのかを問う熱き論争があった。未だにこの論争は決着していない。

ダイアーは「国家が進歩と変革を遂げる決定的要因は、国民の知性と徳性であり、明治維新が成功したのは、日本国民の自ら培ってきた精神力が変革を求める衝動となって噴出した結果である。その精神力とは国の統一と独立を大切に思う献身の精神であり、また外国への隷従に甘んじることを潔しとせぬ名誉を重んじる心であり、それは個人として、また国民としての強い衿侍に裏づけられていた」と評価している。

工部大学校の生みの親は長州藩士 5 人組

文久 3 (1863) 年、長州藩士の伊藤博文、志道聞多(井上薫)、山尾庸三、野村弥吉(井上勝)、遠藤謹助達は、西欧の技術と制度を学ぶ為に密航し、ロンドン大学に留学した。

伊藤、井上(馨)は国内政変の報に接して帰国するが、山尾は造船、遠藤は経済、井上(勝)は鉱山と鉄道を学び続けた。山尾は、3年後の慶応 2 (1866) 年、単身スコットランド・グラスゴーに赴き、昼はネピア造船所

の見習工として働き、夜はアンダーソンカレッジで造船技術を学んだ。

明治 3 年に工部省が設立され、伊藤博文が工部大輔に、山尾庸三が工部権大丞に就任した。新橋―横浜間の鉄道敷設計画を策定した鉄道技術者エドモンド・モレル(英)が、工業化を推進する役所と技術者を養成する学校を設置する必要があると提案した。

滞英中の伊藤博文は明治 5 年 8 月に密航時に世話になったマセソンに、工学校創設への協力と教師周旋を依頼した。そして、近代工学の父と言われるランキン教授が推薦した愛弟子のヘンリー・ダイアーを都検とする 9 名のイギリス人教師を招聘し、明治 6 (1873) 年に工学寮を開校した。

ダイアーは、工部大学校の要因の一つに、学生の多くは士族の出身で、サムライ魂を持ち勤勉で知性的であったことを挙げている。

徳治国家論と近代国家論との論争

明治元(1868)年「五箇条の御誓文」を公布し、明治 5 (1872) 年「学制」を公布し、太政官布告で、「人々各々その身を立て、その産を治め、その業を盛んにする。人が立身出世し、悔いのない生涯を送る為には学問を修めなければならない」と個人主義・実学主義の学問観を示した。

新たに出発した日本の教育現場は、世界のことを教えられる先生がいなく、使える適切な教科書もなかった。そして、西洋に魂を奪われる若者が年々増加し、皇室のご存在や日本語、更には日本の精神文化を無視する者が続出し、明治 10 年を過ぎる頃には国の体制を揺るがすまでになった。

明治天皇は、明治 11 (1878) 年に諸地方を御巡幸になり、各地の教育状況を御覧になられ、翌年、元田永孚に命じて天皇の教育に対する考えを纏めた「教学聖旨」を政府首脳にお示しになられた。

教学聖旨は「教学ノ要、仁義忠孝ヲ明カニシテ、智識才芸ヲ究メ」と仁義忠孝を本とし智識才芸を末とする本末是正論を展開している。智識才芸の「学制」以来の教育政策の結果、忠孝の義が忘れられ秩序が乱れることになったとの現状認識を示した。

教学聖旨に対し、内務大臣の伊藤博文は、

井上毅に起草させた教育議で、①近代国家における政治と教育の関係、②近代国家における価値中立性の問題、③漢学の観念性と近代科学の実証・実験主義の問題3点にしばって反論した。

ヨーロッパ近代国家は、「信教の自由」を表面的に唱えつつも、その背後に、国家理性として「キリスト教精神」を前提にしている。

昭和17(1942)年海後宗臣は、「元田永孚は、我が国には基本となるべき教えが存在し、それが諸外国における宗教の占める位置と同様な性質をもち、国民全般の生活を帰一せしむる根源力とならねばならないと主張した」と評価している。

海の東西を問はず、総ての国が憲法及び政治の淵源基礎を己れの本国の歴史典籍に取らぬ国は無い。従って井上毅は、憲法と皇室典範の起草の先立ち、猛烈に国史古典の研究を進め、『古事記』にある「しらす」の重要な意味を突き止めた。

『領(うしは)く』は、豪族が私物化した土地を、権力をもって支配することであり、『治(し)らす』とは、『知る』が語源で、天皇が無私の心で神々の心、民の心を知ろうとされ、それに自らを合わせようとされる天皇の「徳」による統治のことである。

井上は、明治憲法の第一条を、「日本帝国ハ萬世一系ノ天皇ノ治ス所ナリ」としたが、伊藤博文から「これでは法律用語としていかなものか。外国からも誤解を招く」との異論が出され、「大日本帝国ハ萬世一系ノ天皇之レヲ統治ス」と改められた。

工業化が生み出した軽躁浮薄の現状

県知事会議が採択した「徳育涵養の義につき建議」は言う。小学校では、博物の学理を聴き数学の初歩を修めれば、忽ちその知識を誇り、父兄を軽蔑する。高等小学校を卒業する者は、往々にして父祖の仕事を好まず、官吏や政治家を志す。中学に入る者は、学業中途の生徒でも、天下の政治を談じ、自ら校則を侵しながら、逆に職員の処置の可否を鳴らし、紛争を起こそうとする者すらいる。小学校教師となっても『恒心』がなく、教職を糊口をしのぐ為の職業と考え、義務年限後に教職を去り、よりよい就職を求める有様である。

知事の建議を受けた天皇の教育勅語編纂の指示を受けた井上毅は、起草に先立って「君主は臣民の心の自由に干渉しない」を始めとする七原則を立て、元田永孚と意見交換しながら起草した。

井上が発見した「しらす」の精神は、「教育勅語」にも生かされることになる。しかしながら、私は、井上の明治憲法第1条の案が伊藤によって改められたことにより、後に徐々に「しらす」という概念が薄れていく原因になったと思う。その結果、教育勅語の「徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」に言う「徳」が「しろしめす」と言う意義であることをはっきり認識した教育勅語の解説書は見当たらない。

軽躁浮薄の風潮を憂えた元田永孚と井上毅により「最後の砦」として教育勅語が煥発されたにも拘らず、自由主義、個人主義、社会主義等が台頭し、弛緩と退廃に流されて行った。教育勅語を理解できる人材が育っていなかったこともあり、アジア各国が西洋国家の侵略に晒された時代に、富国強兵策を国是として近代化が進められ、日清日露戦争に勝利し、一人日本だけが西洋に対抗する強国となり、日本人の中に民族的優越感と傲慢不遜な風潮を生んだのである。

日本人としての矜持を持つ工業人の育成を

「技術者こそ真の革命家である」を信条とするダイアーは、時間と距離の短縮という技術の革命力が社会と経済と政治の大変革をもたらすことを実証するものとし、国際社会の中で何んとしても欧米列強と対等の立場を確保し、主権国家としての面目を貫こうとした日本人の愛国的な悲願こそ、維新後の近代化を推進した最大の原動力であったとしている。

内田盛也氏は、明治維新の大事業、国家が進歩と変革を遂げる為に、国民の知性と徳性を基に、外国への隷属を排除せんとする個人個人の強い矜持と名誉心に裏付けられたエンジニア達は鉄道の敷設、道路と河川の改修、港湾施設の整備、橋梁の架設、電信電話網の普及等を実現し、封建性のしがらみを打破し、世界の列強と対等に肩を並べる国民国家建設への土台を作ったと評価し、明治維新の大事業を成し遂げた技術者達を「サムライエンジニア」と名付けている。

トヨタのTQM推進部課長肌附保明氏は、戦後の飛躍を遂げてきた技術・技能者達の精神の基礎は高潔な人格を尊ぶ道徳性、即ち武士道であると語っている。

したがって工業教育の土台には教学すなわち確固たる人格教育(徳育教育)がなければならない。このことが「ものづくりは人づくり」の意味するところである。

今こそ近代に内在している課題を克服する哲学を創出しなければならない。